

川
幸夫動物文学全集
9

講談社



戸川幸夫動物文学全集9 ガラパゴス群島ほか

昭和五十一年十二月十八日 第一刷

著者 戸川幸夫

装幀者 辻村益朗

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二一 郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五一一二二(大代表) 振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

©戸川幸夫 一九七六年 Printed in Japan

目次

ガラパゴス群島	5	青いレンズ	22	縄張りの歌	46
シロンジの人喰虎	67	ハブ	91	狼の碑	115
いぬ馬鹿	137	武尊の兄妹熊	158	コンドル	179
熊犬物語	198	象使いのボスコ	218	姿なき影	241
バイコフの虎皮	255	隊長と犬係りと樫犬たち	268		
夢の中の虎	300	謀議	315	老醜	326
解説・尾崎秀樹	337				

ガラパゴス群島

強烈な太陽であった。

濃度の強い色メガネで保護しなければ、忽ち^{たちま}に眼をやられてしまうほどの光線が頭の真上からぎらぎらと降り注いでいた。

海洋の照り返しも強烈であった。

海面に落下した太陽光線の幾割かは、海に吸収されてゆらゆらと碧い^{あお}海を、さらに青く輝かせて海底へできるだけに到達しようと沈んでいったが、多くはゆらめく波にはね返され、反射光となって空中に飛散し、それが下からさらにぎらぎらと照りつけてきた。

空も青く、海も碧い。その中に在って島だけがコーヒー色をしてくすんでいた。

その島は英国領で英国名でチャタム島と呼ばれているが、その昔、スペインが南米を支配していたころはサンクリストバル島と命名していた。この島はガラバゴス群島の中でも一番、東のはずれに在って南アメリカ大陸に近い。

ガラバゴス——それはスペイン語で亀という意味で、以前はコロン群島と呼ばれていたが、スペイン人がこの島に

入ってきて亀の多いのに驚いてガラバゴスと名づけたと伝えられている。

南米エクアドルから西へ千キロ、東太平洋上に赤道を挟んで点在する十四の小島からなる群島で、最大の島でも長さは百二十キロに過ぎない。

ひじょうに古い時代に、海中火山の爆発によって生じたと見られるこれらの島は、そのどれもが生々しい熔岩によって塗り固められていた。しかもその熔岩はごく最近に造られたように風化しない鋭いエッジを保っている。それはこの島々が強風にさらされないことを示していた。ごつごつとした岩場が連なる海岸線には、ほんのわずかばかりの砂浜があつてマングローブの林が恥毛^{ちげ}のように生えていた。

熔岩だらけの原野には巨大なサボテンが生え島の高い部分には香りの強いバルサントの樹の疎林があつた。貿易風が湿気を運びこむので植物が生きられる条件をつくりだしたのだろう。

一八三五年の九月十七日の朝のことであつた。一艘^{ふね}のブリッグ型二本マストの帆走軍艦がチャタム島の南岸にある湾に錨を下ろした。船は二三五噸で船尾にはビーグル号と艦名が書きこまれていた。

この湾は火山の噴火口であつたのが貿易風によって押しよせる波に浸蝕されて火口壁が崩れ落ちて湾を形成したものとと思えた。

船が投錨とうがなしてから一時間ほどしてボートが降ろされ、一人の士官と数名の水兵、それに軍人ではない一人の青年が乗り込んだ。

ボートは湾内を岸壁に沿ってしばらく漕こぎまわったあとで、小さな砂洲の上陸地点を見つけて近よっていった。

そこは無数のアシカたちによって占領されていた。アシカのボスは自分らの領地に侵入してくる者に怒り、オッ、オッ、オッ、オウ、オウ……と甲高い叫びを挙げながら海に飛び込み、ボートの周辺を威嚇遊泳した。

乗組員たちはちよつと驚いたようだったが、獣が威嚇以上の行為に出ないことを知ると最初の目的どおり砂浜にボートのへききを乗り入れた。

それから人々は靴を脱ぎ、ズボンをまくってドボンと海にとび降りた。

青年は採集道具などを抱えこんでいたので一番おくれた。

そのときアシカのボスも這い上ってきていて、すぐ傍の青年に向つて突撃してきた。青年はつき進んでくるアシカの表情を観察するのに氣をとられていたので、危うくアシカの第一撃を受けるところだった。アシカの牙が青年の上着の端を捉えようとしたとき、水兵の一人がオールでアシカの尻を叩いたので、アシカの攻撃は水兵に向つて変更され、青年は砂浜をかけることができた。

陸上でのアシカの動作は人間の敏捷びんぎさには叶わない。だ

から上陸した人間たちはげらげら笑いのうちにこの寸劇を楽しんだ。

「ダーウィン君、危ないぞ。いくらのもな奴でも、捕えたら君を組み敷くぐらいはわけないからね」

ビーグル号水路部長のビューフォード大佐が注意した。

ビーグル号はその湾に二泊することになっていた。そしてビューフォード大佐と水兵たちはその間に島周辺の測量をしなければならなかった。

「では僕は島の内部に入つてみます。野営しますがご心配なく……」

ダーウィンと呼ばれた青年はそう言つて採取道具や寝具や食糧をつめた袋を肩にした。二十二、三歳の若さで、身長六フィート、幾分猫背だが眉が太くて濃く、瞳は円らで澄んでいる。鼻も逞しく、口もとがひきしまつて、美男子ではないが頼もしさを感じさせる青年だった。ビューフォード大佐はフィッ・ロイ艦長が自分の俸給の一部をさいてまで乗艦させたこの青年科学者に万一のことがあつてはと、水兵を一人従者としてつれていつては……とすすめたが、ダーウィンはむしろひとり調査することを喜ぶ様子だった。

チャールス・ダーウィン——後年「種の起原」と「人類の由来と性に関する選択」で古い学説を打ち破つて、進化論学説を樹立した偉大なるこの英国の博物学者も、まだこのころは無名の一学徒にすぎなかったが、彼の部厚い胸の

中には「種の起原」へと発展させるべき自然界に対する幾多の疑問——萌芽——を抱いていた。

彼は黙々と熔岩の丘へと登っていった。登りつめた台地には他の島々と同様に軟らかな、まるい輪郭をもって隆起した古い時代の火口の名残りである小さな丘がそここに散らばっていて、うねりのような起伏となつて続いている。

ダーウィンは、この外観ぐらい無愛想なものはないだろうな、と思った。でこぼこの、うち寄せる波に似た玄武岩性の熔岩の層は幾つもの大きな裂口があつて、その醜い層の重なりによつて出来た原がずっと続いている。そしてその表面を陽に灼けてかさかさ乾いたコールディニアやカステラの藪が覆っていた。生命は、そこにあるのだがその存在の色は示していない。

まだ昼前だというのに岩石だらけの地表は太陽に熱せられてまるでストープからでも発するような熱気にむし返し、息ぐるしかつた。

ダーウィンはしたり落ちる汗を拭きながら、荒涼とした原野をさまよつた。苦しみだけが残されているような世界ではそこいらの灌木林までが不快な香りを発しているように思えた。ダーウィンはそれでもできるだけ多くの植物を採取しようと努力したが、極くわずかばかりのものが手に入っただけであつた。赤道直下にありながら、この島のみすばらしい雑草は小さくいじけていて、むしろ北極地方

の植物と言うほうがふさわしいように思えた。藪はすこし離れたところから眺めるとイギリスの冬の風景を思わせるほど青味がなくて殺風景だった。だが近寄つて観察してみると、それらの木には葉がついていて大部分が小さな花さえ咲かせているのだ。

雨季になるとちよつとの間、島は緑色を呈するという話だったが、ダーウィンがいま見るところでは、全島の植物が灰白色で、木の葉がなく、日陰を作っているのはウチワサボテンとアカシアの木だけのようであつた。

午後になると暑さはだんだん強くなつてきた。太陽の直射にさらされた皮膚がひりひりと疼いて、ほてつた。でこぼこの岩の原や藪を分けて歩くことが、ひどく苦痛になつてきた。

いささかうんざりさせられたとき、ダーウィンはまるでローラーで地ならしをしたように幅が一メートルほどの平らな道がずっと島の内部の方に向つて続いているのを発見した。

おヤツ？ とダーウィンは立ちどまり、小腰をかがめた。それは人間が作った道ではなかつた。ローラー道の両側に引つ掻き痕がついている。ではどういふ動物がこんなに整然とした踏みつけ道を作つたのだらうか？

ダーウィンには理解ができなかつた。理解ができないという事で彼は勇気づけられ、眼を輝かしながら、その道について歩いた。

空にはグンカン鳥やカツオ鳥の飛翔が美しく眺められた。

熔岩の上には、熔岩とまったく同じ色の小さなトカゲがちよろちよろと這っていた。藪にはヒワやツグミの類の小鳥が、数は少ないが見られた。そしてそのどれもが彼を怖れる様子を少しも示さなかった。それはダーウィンがビーグル号に乗ってこれまで終めぐつてきた南アメリカやその他の島々で見られなかったこの島独特のもので、彼らは人間が怖ろしいものではなく、無害な生物仲間だと信じているからに違いなかった。

一時間ほどの追跡の努力が突然にむくわれた。それは二匹のすばらしい大きな陸亀が熔岩の間から生えているウチワサボテンの陰に居すわっていたことだった。それはどちらにも、どう少なく見ても二百ポンドの目方はあるに違いない。二匹はサボテンの葉を食っているところだったが、ダーウィンの足音に気づくと食事をやめてじつと彼の方を見つめた。

ダーウィンはこんなに巨大な亀を見るのは初めてであった。その亀の顔はノアの洪水以前にいたというギリシャ神話の一つ目の巨人サイクロプスに似ているように思えた。

ダーウィンはその亀の前にしゃがみこんだ。すると一匹はのそのそとサボテンの向うへと這っていった。そのとき、ダーウィンは彼がいま歩いてきたと同じ道路をこの亀が造るのを知った。いま一匹はその場に踏みとどまりはし

たが深い低音の声を発して首を縮めた。

ダーウィンはこの苦しい探査が無駄でなかったことを喜び、ガラバゴスという名が、この亀のためにつけられたことを知った。

九月二十三日、ビーグル号はチャタム島から西南にあたるチャールス島に移動していた。この島はスペイン時代にはフロレアナ島といった。永いこと海賊たちの根拠地になっていたが、その後は捕鯨船の基地として使われ、二百人ほどの人が小さな植民地を作っていた。

これらの住民の殆どは政治犯としてキトーを首府とする赤道共和国から追放された人々であった。それらの植民地は海岸から四哩ほど入った一千フィートほどの高所にある、海岸に近い塩水湖では製塩が行われていた。

ここでもダーウィンはひとりて歩いた。道路が作られていたのでチャタム島ほどの困難はなかったが、道路ぞいの最初の部分はチャタム島と同じような味気のない、葉の少ない藪を分けて通らねばならなかった。

だが高く登るにつれて樹木は次第に緑を加えてきた。これは島の高い部分が雲にかくされ、湿気が多いところからくるものと思われた。

ダーウィンは植民地を越えて山陵に立ったとき、さわやかな南の風をまともに受けた。島の南斜面は緑色の繁茂し

た植物に蔽われ、甦よみがえらされた思いがした。

ダーウィンは思いつき大きく呼吸して、汗に濡れた体を拭いた。その付近には羊齒うしきの類が繁茂していたがヘゴや椰子椰子の類は一本も発見することができなかった。

この島から三百六十哩かり北のココス島は椰子科のココア・ナツの林があるのでその名がついているのだが、この島にそれが一本もないということはダーウィンには不思議でならなかった。海流が南から北へと流れているので、海流のつて実を運び繁殖する椰子が、この島にその実を漂着させ得ないからだろうとは思うが、ではココス島の椰子はどこから来たのか？ という疑問にぶつかるのだ。

山陵から見下ろすと住民たちの家屋は平たい地面に不規則に散らばっていて、家の傍の畑にはサツマイモやバナナが栽培されていた。

この土は黒かった。それはダーウィンの故郷イギリスの土に似通っていた。ブルーや北部チリーの焼け焦げたような赤土を飽きあきするほど見てきた後だけに、この黒土はダーウィンの郷愁を誘った。そういえば彼がビーグル号に乗艦して英国のデボン港を出航してから早くも四年の歳月が過ぎていた。

ダーウィンは帰途、集落に立ち寄り、畑にひざまずいて黒土を両手に掬はって頬ずりをした。ぶんと匂う土の香までが故郷のそれに似ていた。

一人の老人が出てきてダーウィンに話しかけた。老人

は、集落の者たちはひどく貧乏をしているとこぼした。だがダーウィンの眼には彼らがそんなに苦勞くろうせずその日の糧を得ていることで、むしろ倖あやせてはいないかと思えた。

この島の森の中には野生化した豚や山羊がたくさんいるとダーウィンはその老人から聞かされた。もともとガラパゴス群島には哺乳類はいなかったのだが、今日では野豚と野山羊と野犬と野猫と鼠とコウモリが繁殖している。コウモリがどのような経路でこの島に渡ってきたのかは不明だが、おとの哺乳類たちは人間が運びこんだものにちがいなかった。海賊や移住者たちが食糧としてもちこんだものが逃げて野生化したのだろうが、それらの新しく入りこんだ動物たちが、この島に大昔から棲息し、平和に暮してきた動物たちにどのような影響を与えているだろう。山羊や豚は森の下草を食べるし、野犬や野猫は鳥たちを捕食するだろう。鼠は植物の実を喰い荒すに違いない。そうしたことで、この島の持つ特異な生物界のバランスが破壊されることはないだろうか——とダーウィンは考えた。

この島の住民たちは、銃器を持たないので、野山羊や野豚を獲ることができなかった。そんな敏捷な野獣を苦勞して獲るよりも、もっと楽々と美味い肉を手に入れることができたから彼らは一貫してその方を選んだ。その美味い肉の提供者は、ダーウィンがチャタム島で驚かされた巨大な亀——ゾウガメなのだ。

ゾウガメはこの島にも昔は非常に沢山いたと老人は語った。だが食物を与えずとも、永い間、元気に生きているこのカメは捕鯨船などの長期航海を続ける人たちに新鮮な肉を与えるという事で喜ばれ、濫獲された。住民の食糧としても盛んに狩り立てられて、近ごろではひどく数が減ったと老人は言う。それでも二日ほど亀の胤をすれば一週間分の食糧を得るのは楽で、数年前に立ち寄ったフリゲート艦の乗組員たちは一月で二百匹のゾウガメを捕えて食糧として運び去ったと語った。

ダーウィンは悲しかった。人間という無慈悲な生物の進出によって、この島に太古から栄えてきたゾウガメは絶滅しようとしている。その運命が他の島のゾウガメに移行しないと誰が言えるだろうか。

政治犯たちがこの島に移されてから六年目だということだが、その六年間にこの島の生物界のバランスは大きく変えられようとしている。ダーウィンは天を怖れぬその所業を憎んだ。

集落のはずれで、彼は再び胸の潰れるような思いをさせられた。

それは十二、三歳の少年が井戸の傍に坐って小さな棒をもって水たまりを覗んでいる風景だった。少年の坐っている傍には小鳥の死骸が小さな山積みになっていた。少年は小鳥が水を飲みにくるのを待ちうけていて棒をふるって鳩やヒワを殴り殺しているのだった。

ダーウィンの問いに対して少年は、自分は毎日こうして食糧にする小鳥を得ているのだと答えた。この群島の鳥たちは、六年間の危険な人間との交際期間をもちながら、未だに人間の酷薄さを学習していないのだ。この鳥たちの人の好きは一体どこからきているのだろうか？

面白いことにチャタム島では到るところで見ることの出来た野鼠が、この島には一匹も見当らないことだった。島に住む人々にたずねてもここには鼠はいないということだった。

ダーウィンはチャタム島で採集した野鼠は明らかにアメリカ大陸の鼠の特徴を示しながらもチャタム島土着の鼠としての変化を見せている。チャタム島に繁殖している鼠が、なぜチャールズ島にはいないのか？ ダーウィンはそこにガラバゴスの秘密があり、群島の成因を考えてみなければならぬと思った。

ビーグル号にもどってからダーウィンはこの問題について考え続けた。そして、この群島の島々が同じ時代に海底火山の噴火によって海上に姿を現わしたものではあろうが、島々はお互いに関連があったのではなくて、個々の独立したものとしてつくられたに違いないと結論した。

今日から見れば明々白々たる事がらではあるが、ダーウィンの青年時代にはヨーロッパではまだまだ旧約聖書の創世記に書かれてある「神はまた申されし……水は生き物の群れで満ち、地は生き物を種類にしたがっていだし

……、われらに似せて、われらの像のごとく人をつくりたまえり……」という思想が根強く人々の頭を支配していた。地球上の大陸や海洋や山や河川や谷間や平原が生じたのはノアの大洪水の結果、形づくられたものであり、すべての生命は神の力によつて突然に、別々に、奇跡として創造されたものであるという思想であつた。そしてこの奇跡現象が現われたのは紀元前四〇〇四年だという説が広く信じられていた。

十七世紀のなかば多くの人々から聖者と崇められていた大主教のジェームス・ウッシャーがこの説が真実であると裏うちしたことにより、この天地生物の創造説は動かすべからざるものとなり多くの聖書の欄外に記され、信仰の教義となり、社会的常識となり、人類が万物の長であるという特殊な地位を価値づける基礎ともなつていた。

父ロバート・ダーウィン博士の命で、ケンブリッジ大学に牧師となるために三年間を学ばせられたチャールス・ダーウィンが、最初のうちはこの教義を反抗することなく受け入れたとしても無理はなかつた。

彼が自然の形成について眼を開くようになったのはケンブリッジ大学の教授で博物学者である恩師のヘンスローが、ダーウィンの船出にあたって艦内で読めとすすめたチャールス・ライエルの地質学原理に依る点が多い。

ライエルの発刊されたばかりの地質学原理の第一巻をわざわざビーグル号まで持参したヘンスローは、それでも、

「この本は面白くて役に立つが、事実を述べている箇所以外にはあまりこだわらないように注意することだ。彼の論理は飛躍していて荒っぽく、ひとりよがりのところが多いから……」

と注意することを忘れなかつた。

だが、ダーウィンはその本を読んでゆくにつれてライエルの説にひどく心を惹かれた。ライエルはそれまで広く信じられていたノアの洪水説に真つ向から反駁して、地球上の大陸や海洋や山岳や河川湖沼や平原はノアの洪水によつて形づくられたものではなく、雨や風や、地震や火山活動などの自然の力によつて、一度にはなく徐々に造られたものであり、それらの力は現在もお地球を変化させつたと説いていた。ライエルは地質学原理の第一巻の中で「私たちが回顧しうる限りの太古から今日にいたるまで、現在作用している諸原因のほかにどんな原因も存在しなかつた。またそれらの諸原因は現在それらが及ぼしているエネルギーと異なつたエネルギーをもつて作用したことはなかつたであらう」と書いていた。

ヘンスロー教授が、ひとりよがりの論理だと指摘したのはこういつた点にちがひなかつた。ダーウィン自身も、最初にこれらの部分を読んだときにその大胆な推理に驚愕してしまつた。地球はノアの洪水によつて造られたとする通説——それは動かし難い真理であり、教義の基礎であつたもの——への正面からの対立であり挑戦といえた。異教的

であり、神を恐れぬ所業と非難さるべきものであった。だが、その勇氣にダーウィンは深くうたれた。そして、船酔いに悩まされながらも、この部分をなんどもくり返して読み、また考えた。自然界と科学に対してダーウィンの新たな眼が少しずつ開きはじめた。彼はライエルの説に傾きはじめていた。

とは言うもののライエルの説を実証もなく、そのまま鵜呑みにするにはダーウィンがそれまでに受けた教育の力があまりに大き過ぎた。ダーウィンを神学から博物学へと導いてくれたケンブリッジ大学の二人の恩師、ヘンスロー教授と地質学のセジック教授すらもライエルの説を素直に認めようとはしていなかったのだから……。

だが、ライエルの説に対して半信半疑に抱いていたダーウィンの疑問は間もなく解けるときがきた。それはビーグル号がデボン港を出てから二十日目の一八三二年一月十六日のことで、そのときビーグル号はアフリカの西海岸ベルデ岬沖にある群島の一つ、セント・ジャゴ島のプライア湾に投錨していた。

ダーウィンは甲板に置かれた椅子に腰を下ろして荒涼たる島の風景を眺めていた。昔の火山の噴火と熱帯地の太陽の焦げつくような熱気のために土地は植物の生育には適さなくなっていて広い熔岩の原には一枚の緑の葉も発見できないようだった。それなのに野生の山羊が数少ない鳥といっしょに暮らしていた。

雨の降るのは極くまれだが、一年のわずかな期間だけ篠をくような豪雨が降り注ぎ、わずかばかりの植物が熔岩の隙間から芽を吹き出す。それも間もなく枯れるが山羊たちは自然がつくり出した乾草を食って生き続けているのにちがいないとダーウィンは考察した。

そのうちダーウィンは海岸の絶壁に沿って白い幅広の一筋の帯が何キロにも互^{たが}って続いているのに気づいた。

そこでボートを降ろして接岸して調べてみると、それは白い石灰岩の中に埋もれた沢山の貝殻で、その貝は波うち際に繁殖している生きているものとよく似ていた。

貝殻の層は水面より十四メートルも高いところ^{ところ}に在った。そこは絶対に波のとどかない高さなのだ。

ライエルの言葉がダーウィンを導いた。そして彼は地層が彼に語りかけてくる驚くべき地質学の物語を無言のうちに聞くことができた。それはダーウィンにとって未知の先覚者との対話であり、大自然との対話であった。

ダーウィンは夢中になってその語りかけに耳を傾けた。

白い貝殻の層はかつては海底の一部だったのだ。古い時代のあるとき噴火による熔岩の流れがそこに落ち込んで貝殻層を蔽ってしまった。熔岩の熱のために貝殻層の上の部分は結晶状の石灰岩に変わり、ある部分は斑岩になった。その後、海底を隆起させる力が働き、貝殻が栄えた海底を水面上十四メートルの高さにまで押し上げたのだ。

これは天地創造説では説明のつかないことだった。天地

自然やあらゆる生物を一瞬にして神が造りたもうたとするならば、海棲の貝がなせ十四メートルの海面上に多くの死骸をさらさなければならぬのか——？

ダーウィンは大自然の語りかけを人間はもっと真剣に、謙虚に耳にしなければならぬと悟った。

彼のこの考えはその後三年間を南米海岸ぞいに航海して陸地の隆起や陥没について調査したつみ重ねによって、ますます強いものとなった。そして決定的にその考えの正しさを立証したのは一八三五年の二月二十日にダーウィン自身が南米のチロエ島でぶつかった大地震だった。

この大地震の結果、陸地が六十センチから九十センチも隆起し、満潮線から三メートルも上方に、岩にくっついたまま腐敗しているイガイの群れを見つけたからである。自信をもったダーウィンの眼は次第に大自然の動きに対して新しい光をあてて視るようになった。彼はアンデスの山腹を削って流れ落ちる溪流を見て地球を徐々にではあるが確実に造りかえてゆく偉大な力を知った。風も、波も、すべてがライエルの説の正しさを教えてくれた。彼は南米大陸の東側で見た砂と小石のいりまじったもの凄く広大な平野がなぜ存在しているのかをもう一度ふり返った。そして彼がアルゼンチンの大草原で発見した巨大な野獣の化石についても考え直した。彼が発掘した古代四足獣の化石の一つ——トクソドン^{Tokosodon}は象ほどの大きさでありながら、その歯は鼠たちと同じ齧歯類^{齧歯類}のものだった。同じ地層から彼は象仲

間のマストドンや巨大な甲冑^{かっちゅう}をもったアルマジロの化石を発見していた。小さな馬の先祖のエクウスの化石も掘り出していた。これらの化石も、熔岩や石灰岩と同じように、彼に向って自分たちの歴史を物語りたがっているのだ。犬のように小さな馬、象ほどの鼠の類——そんなものは今日、地球上のどこをたずねても見つかりはしないのだが、神が創りたもうたものとすれば、神はなぜこの必要な生物を創り、そして滅ぼさせられたのだろうか。

絶滅してしまったこれらの奇つ怪な化石動物と今日なお生存している動物たちの間につながるものはないだろうか？ あるとするならその「失われた環^{リング}」は何なのだ？ 一つの謎は次々と新しい謎を生みだしてダーウィンの心を支配してゆくのだった。

ビーグル号はチャールス島を抜錨すると群島中最大の島であるアルベマール島（スペイン名イサベラ島）の南西端を迂回して九月二十七日この島とその向いにあるナールポロ島（スペイン名フェルナンディナ島）の中間にさしかかった。

どちらの島も黒く露出した熔岩の広大な奔流で覆われていた。そしてアルベマール島では小さな噴煙が火口の一つの頂から立ちのぼっていた。

夕方、ビーグル号はこの島のバンク湾に投錨した。

翌朝、朝のうちは雲がかかっていたが、それもすぐにな

くなつて強烈な陽がさしてきた。この辺りはフンボルト寒流が流れてきているので、赤道直下で、しかも強烈な日光の直射にもかかわらず空気はしっとりとして涼しかった。

ダーウィンは数名の乗組員と島に上陸した。岩礁に近くと翼が退化して飛ぶことのできなくなった小^コ羽^ハ鵜^ウや小型のペンギンが泳ぎ、ベリカンの群れが鮮やかなダイビングを見せて魚を獲っていた。

この島の特徴は海岸の岩いちめんに群がっている三フィートから四フィートの長さの大きな、醜悪な顔をしたトカゲだった。ダーウィンはこの小さなたてがみのある中世代の恐竜を思わせるようなトカゲ（イグアナ）が遊泳が巧みで、海に潜って魚を捕食していると本に書いてあったことを思いだした。

しかし、いまのダーウィンはすべての現象に対して疑いを持ち、新しく調査しなおす気持になっていた。自分の眼で確かめ、自分の頭脳で突きとめたものでなければ信用できなかった。彼はのろまで、鼻孔から海水を吹きかける以外に抵抗する方法をしらないこのイグアナの数匹を捕えて、胃を切り裂いて調べてみた。彼らの胃の中には細かく嚙み碎かれた海藻がつまっているだけだった。ダーウィンはこの海棲のトカゲが草食性であることを確かめ、いいかげんに書かれた本を捨てた。

内陸部では海岸で見たトカゲによく似たトカゲを見た。これら陸棲のトカゲは地面に穴を掘って群棲していた。こ

の陸イグアナも草食性でサボテンの芽などを食べていた。

この二種類のトカゲは殆ど同じ顔つきをしていた。鼻面が丸くて、ほかの土地の大トカゲのように尖っていないのは彼らが草食性であることからきた変化だと思えた。後頭部から背すじを通して尾へと続くたてがみも似ていた。違ふところは海棲のものは水かきがあり、尾がオールのように扁平で、色は熔岩に似て黒ずんでいた。陸棲のものは丸い円形の尾で水かきがなく、頭部から上半身が黄色く染まっていた。それは彼らが棲む土の色に似ている。

ダーウィンはこの二種類のトカゲは一つの祖先から分れたものであろうと考えた。一方は陸に、そしてもう一方が海に生活の基地を置いている間に体の構造が生活に便利なるように変化していったものだろう。だが二つのトカゲが今日ここまで差異が生ずるまでにずいぶんとながい時間がかかっているに違いない。しかし、それを軽々に決定することとはもちろんダーウィンの学者的良心が許さなかった。彼は二種のトカゲを持ち帰っては解剖して両者の符合しているところや、違っている点を細かく調べた。陸イグアナと海イグアナが混棲しているような場所でも——そんな場所は例外的にしか発見できなかったが——両者は今日では全く交わらず、はっきりと別の種類に分立していることも確かめた。実験として陸イグアナを泳がせてみたり、海イグアナを追いつめてみたりした。海イグアナは泳ぎは上手で両手両足をびたり体側につけてオタマジャクシのように体